

はしてゐる板彫もあり、——供養の鉢を捧げてゐるものや、或は猿や象の供養など、——又、可成りの出来である佛像の頭もあり、其の眼は瞼を閉ぢる様にして内側を見てゐる様になつてゐるものを得たのである。

往時、カンボヂアには、アヴローキテーシヅラ Avalokitesvara 若くは、ローケーシヅラ Lokeshvara 即ち、凡ての慈悲の化身であつて日本の觀音の原型である此の菩薩の崇拜のあつた事は、今日まで疑ふべからざる重要な事であつたが、之等離れ離れの證據で、遺跡自身が、此の重要な事を示す間接の證據を齎すに至つたのである。之に關しては、フィンノ Finot 及びゴルブー Goloubew 兩氏が、ネアク・ペアン Neak-Pean 聖殿について、最近頗る巧妙な研究を發表されたのを讀むべきである。(極東フランス學院學報、第二十三卷、「一九二三年」四〇一——四〇五頁)。泉水の中央に、蓮形の土臺のある小祠があるが、今日では菩提樹に覆はれてゐる。昔、其の中にはリングガ Lingga を置いた様ではあるが、之は一の佛堂であつて、其の破風を見ても知れる様に、樹の根の間に見える所に、釋迦牟尼の宗教的使命の場面を現はしてゐる。他の四個の泉水